

## 陰陽太極鍼の実際

### 特色

- ◎陰陽のバランスを取れば病は癒える。
- ◎体表観察が出来れば誰でも効果的な治療が出来る。
- ◎刺さない鍼で見えてくる経絡の実態。

### (はじめに)

#### 陰陽太極鍼の考えに至った経過

鍼灸医学が現代医学と最も際立って違う所は、鍼灸医学が陰陽論を基本理論としている所である。鍼灸の原典『黄帝内経』に“陰陽は天地の道なり、万物の綱紀なり、変化の父母なり、殺生の本始なり、神明の府なり”『素問・陰陽応象大論』と書かれており、陰陽であらゆる事を分析し、統合する考え方が述べられている。

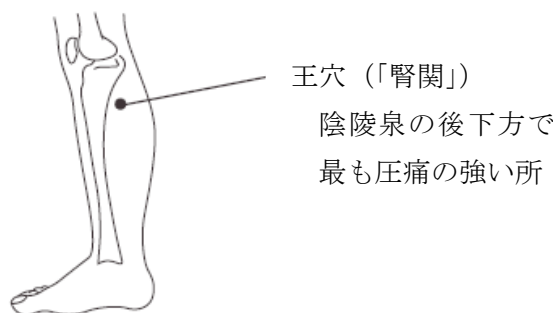
鍼灸は、この陰陽を調整できる。又、陰陽を調整すれば病は癒える。

私が鍼灸で陰陽を強く意識し始めたきっかけは、膝の痛い所の反対側に鍼をして痛みが消え、症状がよくなったといわれた時である。初めは全く理解できなかった。これは“巨刺法(こしほう)”と言って鍼灸の古典『素問・繆刺論』に“右の病は左にとり、左の病は右にとる……”つまり左右の陰陽を調整するとよくなると、きちんと書かれていたのである。それで陰陽を初めて具体的に理解できたのである。

次に、上下の陰陽について、経脈の遠位の経穴を使って反応をとるという“標本根結理論”を応用し、同じ経脈上の上下の陰陽のバランスをとれば症状が改善することがわかり、種々の病症に応用してきた。

更に、五十肩の痛みと運動制限には反対側の足の内側、陰陵泉の後下方にある「王穴」(「腎関」とも言う)に鍼をして劇的に良くなるということを知り、中国の先生から教えて頂き、その時は大変驚き、その理由を調べてみたが、これも陰陽ではないかと気がついた。上下、左右、表裏の陰陽が一穴で同時に調整でき、最も陰陽のバランスが取れるので他の症状にも応用するようになった。これを“陰陽太極鍼法”と称している。

#### 五十肩の特効穴王穴の図



経脈には陰経と陽経があり、手足に三陰三陽、計十二経脈があり、それぞれ臓腑を通過している。この十二経脈は“死生を決し、百病を処し、虚実を調える”（『靈枢・経脈篇』）ので、人の成り立ち、発病、治癒にかかわるものであると書かれている。

様々な病症は臓腑を起点として現れるので、経脈の異常を正せば臓腑の異常も改善し症状も良くなる。

この十二経脈は、環の端が無きがごとく輪になって繋がっており、時間空間で変化する。肺経の「中府」より始まり肝経の「期門」で終わるが、これは皮膚表面の流注であって、“肺経は中焦よりおこり、下って大腸をまとい……”（『靈枢・経脈篇』）と書かれており、内部の流注がある。これを理解することが臨床上大変重要なことである（別紙. 十二経脈流注図参照）。

左右の陰陽（“繆刺法”、“巨刺法”）、上下の陰陽（“標本根結理論”）、左右上下表裏の陰陽（“陰陽太極鍼法”）や、寒熱、虚実の陰陽、時間の陰陽（“子午の陰陽”）、局所と全体の陰陽（“微鍼療法”－耳鍼、頭鍼、手鍼、足底反射など）、すべて陰陽のバランスをとる取穴法で治療を行うことを、私達は“陰陽太極鍼”と称している。

この“陰陽太極鍼”は、病名にかかわらず、どんな症状、どんな病気にも対応できるものであり、いつでも、誰でも、事前の体表観察さえしっかり出来れば、治療後の変化もはっきりと確認できるので、応用が広範である。

取穴においては、経脈の皮膚感覚を重視し、手指で皮膚を撫でて気持ちよい、くすぐったいなどの過敏な所を探して、そこへ一本鍼を置いて体表反応の変化を確認する。

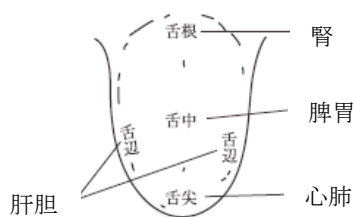
## （方法）

### ◎体表観察が出来れば誰にでも効果的な治療が出来る。

治療には一定の手順がある。診断においては、原則として鍼灸医学の望・聞・問・切の四診法を行う。特に望診（視診）では体格、姿勢、動作、顔色、皮膚の変色などの他、舌診を行う。

舌診……詳しくは舌診の本を参照。

#### 舌の臓腑配当図



舌診は東洋医学の診断法の重要な部分であり、客観性があり、病気の発生発展回復の過程を迅速かつ鮮明に反映するので、大変有意義な方法である。舌は一見しただけで、陰陽、表裏、寒熱、虚実の八綱弁証と、肝胆、心肺、脾胃、腎の臓腑弁証、気血津液、瘀血、痰湿、あるいは外邪の性質まで弁別できるので便利である。

聞診では臭い、声、話し方。

問診では主訴（どこが、いつから、どのような具合か）、随伴症状、既往歴、家族構成、寒熱、飲食、大小便、睡眠、病名、各種検査異常の有無、服薬情報、血圧等を問いカルテに記入する。

切診（触診）で体表反応を確認する。

## (体表反応の確認)

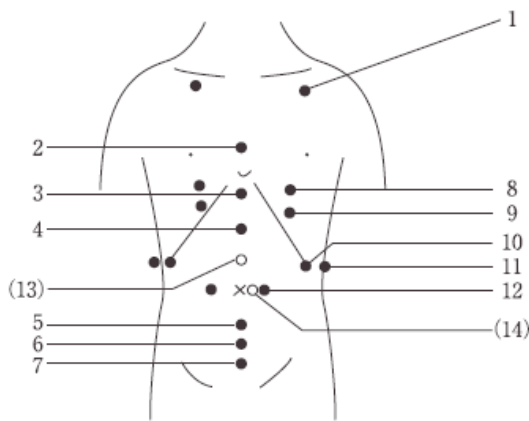
### 1. 脈診……詳しくは脈診の本を参照。

六祖脈の浮沈、遅数、虚実で病位、寒熱、病勢等をうかがい、脈状や六部定位で臓腑の虚実、邪気の盛衰などを診る。特に促結代などの脈の異常があれば注意する。また、遅なら置鍼や灸を、数なら速めの治療が良い。

### 2. 腹診……主として募穴の反応を診る。

募穴は胸腹部の臓腑の所在部位近くにあり、臓腑の反応を現しており、合計 12 穴ある。募穴は腹部の重要な診断点として活用でき、臓腑経脈弁証には欠かせない体表観察点であり、治療効果の判定においても重要なポイントである。

#### 腹部募穴図と表



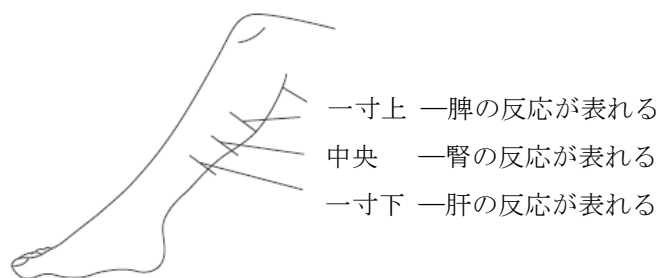
#### 募穴とは

募穴の募は募集の募であり、ないものを求めている状態を表し、所属の臓腑経脈の要求を表している。それ故、治療においては、募穴の反応（圧痛、硬結、膨隆、陷下、寒熱、発汗、変色等）をみて、関連経脈の経穴に鍼灸をして、その反応をなくすようにすればよい。要求が満たされれば募穴の反応は消失若しくは軽減する。募穴の反応が消失すれば病は一步治癒へ向かう。

募穴	臓腑	主な治療穴	所属経	交 会	会穴
1. 中府	肺	尺沢～少商	肺経	手足の太陰経の交会穴	
2. 膻中	心包	曲沢～中衝	任脈		気会
3. 巨闕	心	少海～少衝	任脈		
4. 中脘	胃	足三里～厲兌	任脈	手の太陽、少陽、足の陽明経の交会穴	腑会
5. 石門	三焦	天井～関衝	任脈		
6. 関元	小腸	小海～少沢	任脈	肝・腎・脾の交会穴	
7. 中極	膀胱	委中～至陰	任脈	肝・腎・脾の交会穴	
8. 期門	肝	曲泉～大敦	肝経		
9. 日月	胆	陽陵泉～竅陰	胆経	胆経・脾経の交会穴	
10. 章門	脾	陰陵泉～隠白	肝経	肝経・胆経の交会穴	臟会
11. 京門	腎	陰谷～湧泉	胆経		
12. 天枢	大腸	曲池～商陽	胃経		
(13. 下脘)	(脾)	陰陵泉～隠白	任脈	脾経の交会穴 章門の代用	
(14. 盲兪)	(腎)	陰谷～湧泉	腎経	京門の代用	

募穴の反応は、関連経脈の要穴（井穴、榮穴、兪穴、経穴、合穴、原穴、郄穴、絡穴、八脈交会穴、下合穴等）や対側の募穴、背部兪穴などを取穴して、反応が消えるような治療（鍼又は灸等で）をする。募穴の反応が複数ヶ所の場合、四診総合して、最も主要な経脈経穴を選び治療する。

### 3. 腓腹筋で下肢の流注異常を確認する。

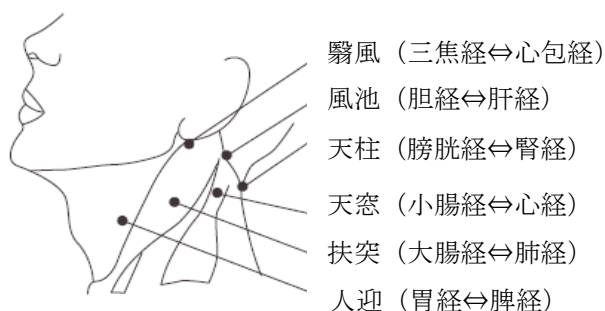


下肢を把握して硬さや圧痛を診ておくと、取穴後の変化の確認に便利である。

### 4. 首周六合で頭部への流注異常を確認する。

首周六合の部位で経別理論で言う頭部への陰陽両経の流注異常が確認できる。

#### 首周六合の部位



喉頭隆起の高さを横へ平行に、胸鎖乳突筋前縁が「人迎」、筋中央が「扶突」、後縁が「天窗」、耳の直下が「翳風」、頭蓋骨の下縁、胸鎖乳突筋の付着部後縁が「風池」、僧帽筋付着部が「天柱」である。

#### 経別理論とは

十二経脈の内、肝経と心経以外の陰経は殆ど頭部へ流注していないが、本経から分かれた経別という別行する支脈が頸部で表裏の陽経と合流し、頭部へ流注しているとする理論がある。故に、合流する頸部の六ヶ所で十二経脈の頭部への流注異常が確認できる。

### 5. 切経……十二経脈の軽擦により“開穴”を探す。

これまでの段階で何経のどのような異常かが分かれば、その経の経穴を軽擦して“開穴”を見つければよいが、十二経脈の要穴の反応を確認すると意外な所に“開穴”が見つかることもあるから軽く撫でてみるとよい。肘から先、膝から下の手足の三陰三陽、十二経脈の流れ具合を、手指で軽く撫でて過敏な所があったら、次にどの方向に撫でた方がよいか患者に問い、流注に対し順なら補(・)、逆なら瀉(:)の印を付けておく。

以上の診断情報を総合的に考えて、その症状が何の経脈の或いは何の臓腑のどのような病変か、陰陽、表裏、寒熱、虚実、気血の虚(不足)実(過、滯、邪)、津液の過不足、瘀血、痰湿等を考える。

#### 治療は、この検出された“開穴”に鍼を置き、事前の体表観察で得られた反応の変化をみる。

“開穴”は病の時、症状がある時、その日、その時の諸条件で変化するので、患者に最も敏感な所を問うと良い。子供でも的確に答えられる。健康な人、健康な時は鈍感である。病気の時、病気の人でも過敏反応を表さない人もいる。このような時は、経脈の通りが悪いからで、他の方法(圧痛、硬結、膨隆、陷下、発汗等の反応を現している経穴を選ぶ)で鍼を置き、体表反応の変化を診る。治療しているうちにはっきりわかるようになることも多い。“開穴”が複数ある場合は、最も敏感な所から鍼を置く。“開穴”が多い場合でも一穴で他の“開穴”が消失することもある。十二経脈は

環の端が無きがごとく、環になって繋がっているので、脈の気血の流れがよい人は反応の変化がよい。鍼を置いたら暫く置鍼し、過敏な感じが消失したか確認して鍼を外す。過敏な感じが変化しない時は、捻鍼して加速させる。又は、耳穴に王不留行の種子などを貼附すれば即変化する。瀉の反応が出ている場合は、経脈の流れに逆らって逆方向へ鍼を置けば、膨隆、硬結が和らいだり、反応の変化がよい。耳に貼る場合、表裏経の反対の経脈のツボに添付すれば陰陽の関係で反応が消える。急性、熱性、実証、瘀血の刺絡適応であれば、井穴、耳穴、細絡等より瘀血を少量取れば血流の改善著しく、症状の変化も早い。

一本置いたら体表の変化を診る。ほとんどの場合、初めの一穴で腹部、腓腹筋、首周六合の反応が変化する。これにより経脈の変化が理解できる。治癒への変化が理解できる。流れがよくなれば代謝を促進し、経脈に繋がる臓腑機能も改善し、臓腑に関連する諸症状も改善する。

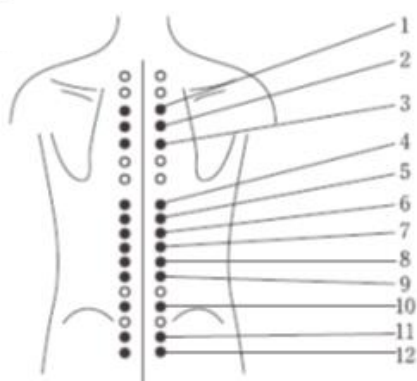
### 次に伏臥位になり、背診を行ない背部の治療をする。

(体幹部と手足への刺激は神経支配が違うので手足の要穴の治療後、体幹部、特に背部の治療を加えると完璧である。)

### 6. 背診……主として背部愈穴の反応を診る。

背中にある背部愈穴の中で、臓腑に関係のある経穴は肺愈から膀胱愈まで計 12 ある。愈穴は、臓腑機能の異常を表す反応点であると同時に治療点でもある。症状あるいは部位などにより、何の臓腑・経脈に関係深いか考え、その愈穴附近をよく調べる。まず、よく診て皮膚の状態を調べる。腠理（毛穴）が開いていれば、そのツボに関連する臓腑は虚している。発汗の有無、体毛、変色、陷下、膨隆など目で見て確認したあと、背部膀胱経にある愈穴を上から順に両側同時に圧してツボの反応（圧痛、寒熱、ざらつき、発汗等）を調べる。次に皮膚上を軽く撫でて過敏な所を探す。

背部愈穴図と表



背部愈穴
1. 肺愈
2. 厥陰愈
3. 心愈
4. 肝愈
5. 胆愈
6. 脾愈
7. 胃愈
8. 三焦愈
9. 腎愈
10. 大腸愈
11. 小腸愈
12. 膀胱愈

### 愈穴とは

愈穴の愈の意味は治癒の癒に通じるもので、字の構成から①応答、②丸木舟③やわらぐと解される。・は裂け目のない大きな丸太、月は舟月の月で舟を表し、リは刃物を表している。つまり愈とは丸太の不要部分を刃物でえぐり取って丸木舟を造るとというのが語源である。そして丸木舟は通信



にも使用されていた。従って、丸太の余分な部分を削り取って(障害を取り除き)丸木舟を造り、信号として用い(内部からの応答、反応がある)、障害が取り除かれれば流れが通じて症状が和らぐという意味と理解できる。故に、愈穴とは臓腑の異常を表す反応点であり、治療点でもある。(柴崎保三『素問新義解』より)

## 愈穴の反応の取り方

○一般的に反応のある反対側の経穴を取穴する。すると左右の陰陽が調整されて反応が消失する。(同側の場合もあるので皮膚感覚を確かめてみると良い。補瀉もわかる。)

○反応点が複数ある場合には、その中でも最も過敏な経穴を調べ、そこへ一鍼し、反応の消失具合を調べる。一穴ですべてが一度に消失する場合もある。例えば左「心愈」一穴で右「心愈」、右「胆愈」、右「小腸愈」の圧痛が一度にすべて消失することがある。これは心は君主之官であり、心が十二経すべてに影響を与えることから、その作用の広範なことがわかるが、心と胆は子午の陰陽(午前と午後の同じ十二時に旺期する)関係にあるし、小腸は心と表裏の陰陽関係にあることでも納得できる変化といえる。また、「脾愈」で反対側の「大腸愈」の圧痛、こわばりなどが瞬時にとれてゆるみ、腰が楽になる。これは、太陰と陽明の表裏関係で陰陽のバランスがとれて変化するものと考えられる。これらはすべて、臨床上、常に普遍再現性のある事実で、東洋医学の陰陽論の具体的な現象として理解できる。

○局所の虚実を調整する。陷下には灸という原則がある。背部愈穴が陷下(虚)していれば、そこは気血不足の状態で栄養の供給が足りない証拠である。このような虚の状態には、灸で温補するのがよい。熱感も鈍くなっているので、点灸なら熱く感じるまでする。温灸は熱さを感じにくいので、少し熱めにしてゆっくり温める。治療後陷下が改善する。これなど、補虚による陰陽の調整という考え方である。

○一般に膨隆、圧痛、硬結等(実)には、局所の瀉法(流注と逆方向に鍼。細絡等には刺絡)をして、瀉実による陰陽の調整を行う。

## 背部愈穴の運動器疾患への応用

○各臓腑の背部愈穴は、それぞれの経脈の病症に応用できる。例えば、肺経上の「尺沢」とか「太淵」辺りの痛みに対して、反対側の「肺愈」へ鍼をすると、病症と同側の「肺愈」の圧痛、硬結が消失すると同時に肺経の痛みも消失又は軽減する。足の母趾、肝経の痛みが同様に「肝愈」で取れる。このとき、やはり反対側がよく効く。又、膝関節の痛みで「内膝眼」(脾経)に痛みと浮腫があり、屈曲しにくい時は、「脾愈」に鍼をすると痛みが軽減し浮腫も減少して屈曲制限が緩解する。その時、強く屈曲して大腿前外側(胃経)に痛みを感じる時は「胃愈」に、「陰谷」(腎経)の凝りがあれば「腎愈」にと、背部愈穴に鍼をすればそれぞれの経脈の流注が改善して、更に楽になる。

○又、坐骨神経は膀胱経と胃経の流注と一致しており、臀部の痛みと圧痛は「胃愈」で緩解する。これは、臀部の圧痛点が小野寺臀部圧痛点と一致しており、胃疾患における反応点であることから、「胃愈」が最適の経穴であり、ここへ鍼や灸をすることにより膀胱経と胃経の両経脈の流注が改善するので、本疾患には欠かせない治療点である。

○五十肩の「肩髃」(大腸経)部が痛くて腕を挙上できない時は「大腸愈」へ、腕を回内しにくく、「天宗」(小腸経)から「小海」(小腸経)辺りが痛い場合は小腸経の流注異常であるから「小腸愈」へ鍼をするなど、どのような運動器疾患でも、何経の異常であるかがわかれば、すべて背部愈穴の反応を調べて、原則として反対側の背部愈穴に鍼をして変化の具合を見ればよい。これらは、体幹と手足の末端の部位的陰陽と、経脈の流注の陰陽のバランスがよくとれて流れが改善し、代謝が促

進んで症状が改善するものと考えられる。

これらの方法は背部腧穴の運動器疾患への応用として広く利用されてよい優れた方法といえる。

### ◎刺さない鍼がなぜ効くのか

現在、私たちは鍼を刺さずに“開穴”に置くだけの治療を実施している。皮膚は中枢神経と同じ外胚葉である。38億年前、宇宙に生物が誕生し、個体発生の進化の過程で、皮膚の一部が陥没し脳になったと言われる。皮膚表皮の、やがて垢となって剥がれて落ちる角質層の部分にケラチノサイトという情報伝達物質の受容体があるという。それ故、皮膚は中枢神経の脳と同じような働きを有しており、最大の「臓器」とか「外臓」あるいは「外脳」とも言われ、多くの情報を発信し伝達し処理している。それ故、皮膚感覚の過敏な「開穴」への刺激は瞬時に脳へ伝達され脳より身体各部へ情報が伝わり、適切に処理されると考えられる。経絡は体表からは見えない。唯一病の時“開穴”より体内へ繋がり、外界と内部を連絡している。その穴位は、軽く皮膚を撫でてみるだけで過敏反応(他より気持ちよい、くすぐったい等)があったり、陥下、膨隆、発汗、冷、熱、硬結等があったりするので容易に検出できる。そこに一本鍼を置くだけで瞬時にして体表反応が変化する。遠くの部位が変化する。鍼を置いた局所の体表所見も変化する。これにより、経脈の流注が改善したことが確認できる。

### (まとめ)

このように、諸々の陰陽の考え方で、あらゆる事が解決できる。この応用が**陰陽太極鍼**である。様々な症状、原因不明の難しい病気、弁証しにくい病症でも、脈が分からない場合でも、時間治療が出来ない時でも、効果的な治療が出来るので、是非追試していただきたい。

最後にこの治療法の特長を挙げると、

- ① 刺さないので痛くない。鍼でなくても王不留行やローラー鍼など他の器具でも応用できる。
- ② 反応の変化を確認できるので、患者と術者双方が納得した治療が出来る。
- ③ 即効性がある(痛みが和らぐ、凝りが取れ、熱や冷えが取れる。顔色が良くなる、脈や呼吸が良くなる、腫れが引く、むくみが取れる等々)。
- ④ 上達が速く、短期間であらゆる病症に対応できるようになり、治療に自信が持てる。

〒080-0010 北海道帯広市大通南 21 丁目 14-2

東方鍼灸院

☎ 0155-24-8111

FAX 0155-24-7281

E-mail [toho1189@toho-shinkyu.com](mailto:toho1189@toho-shinkyu.com)

<http://www.toho-shinkyu.com/>

### (参考文献)

- 『中医雑誌』(日本語版), (1号~29号), 「鍼灸学基礎概論」, 日本中医雑誌社, 1987~1989
  - 『中医雑誌』(日本語版), (1号~29号), 「中医学基礎概論」, 日本中医雑誌社, 1987~1989
  - 『素問』『靈樞』『難経』『傷寒論』等、古典書籍
  - 「中医臨床」「鍼灸ジャーナル」等鍼灸関係雑誌
  - 「黄帝内経素問新義解」(巻1~巻12), 柴崎保三, 東京鍼灸柔整専門学校研究部, 1973~1976
  - 「皮膚は考える」, 傳田光洋, 岩波書店, 2005.
  - 「皮膚感覚と人間のこころ」, 傳田光洋, 新潮社, 2013.
- (発表論文)詳しくはホームページに掲載

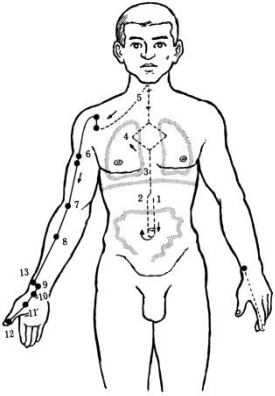
(別紙)

# 十二経脈流注図

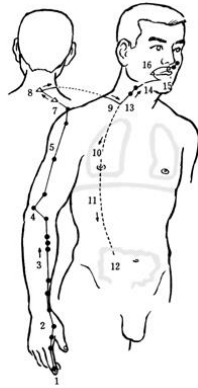
—— 本経の流注図

…… 内部の流注

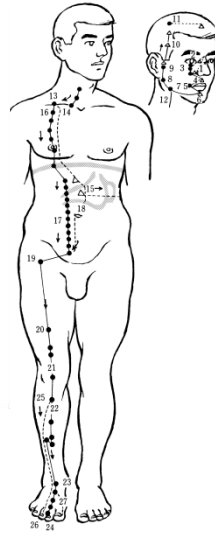
① 手の太陰肺経



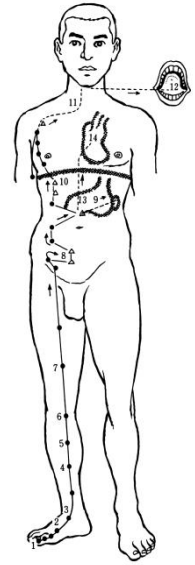
② 手の陽明大腸経



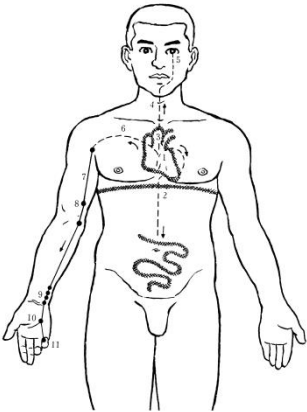
③ 足の陽明胃経



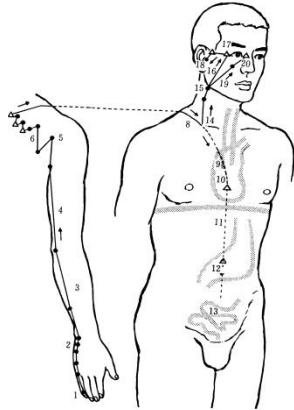
④ 足の太陰脾経



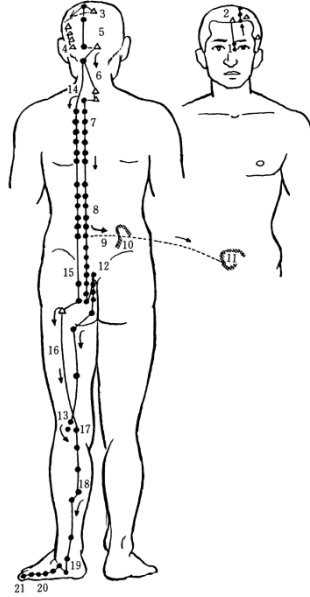
⑤ 手の小陰心経



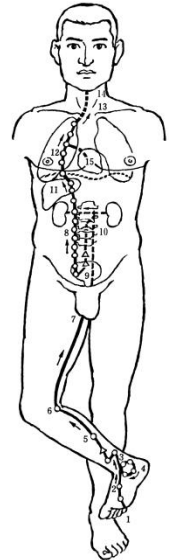
⑥ 手の太陽小腸経



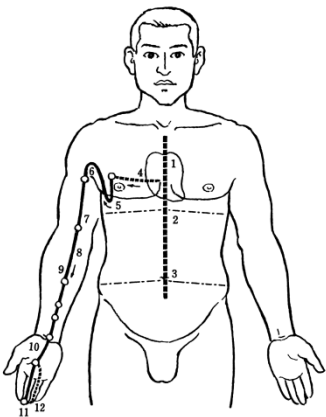
⑦ 足の太陽膀胱経



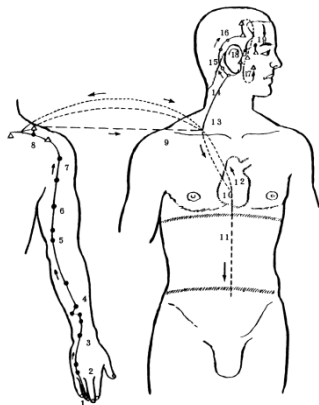
⑧ 足の小陰腎経



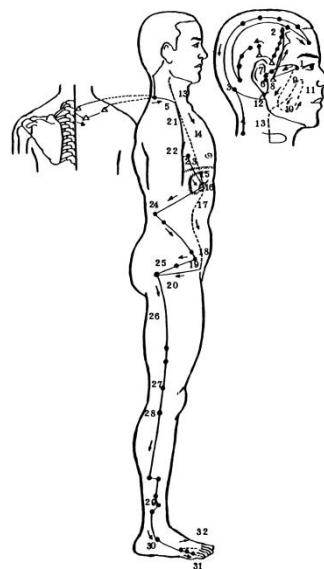
⑨ 手の厥陰心包経



⑩ 手の少陽三焦経



⑪ 足の少陽胆経



⑫ 足の厥陰肝経

